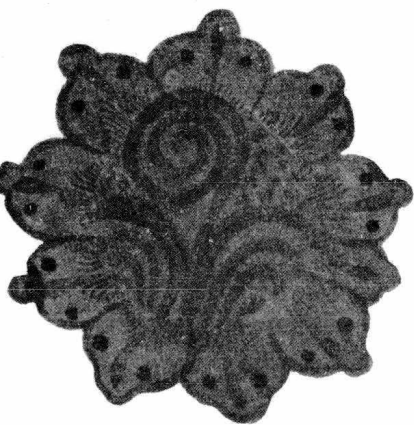




花祭

走

安岡章太郎全集Ⅱ



安岡章太郎全集 Ⅰ

花祭・遁走

昭和四十六年二月二〇日 第一刷発行

著 者 安岡章太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

電話(九四五)一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定 価 一一〇〇円

© Shotaro Yasuoka 1971, Printed in Japan

乱丁本落丁本はお取り替えます。

安岡章太郎全集Ⅰ

花祭・遁走

目次

花祭

遁走

舌出し天使

解説

跳躍とヴィジョン

大江健三郎

520

357

177

5

安岡章太郎全集Ⅰ

花祭・遁走



花祭



真上に明るい温い空があつた。蒸れた綿のにほひと枯草のにほひ、それに土の乾くにほひが、まはりから僕の体を包んでゐる。耳もとでアブのやうに大きな蠅が鈍いうなり声を上げながら、ときどき耳タブにとまつたりするが、追ひ払ふ氣にもなれない。干したふとんの上に寝ころんでゐるのは實際、好い心持だ。眼をあけると、尖つた棟の本堂の屋根瓦が葉の落ちた梢ごしに白く光つてゐる。

和尚さんは僕に、部屋の掃除とふとん干しを言ひつけたまま、どこかへ出掛けて行つた。もうあれからどれぐらゐ過つただらう？　かうやつてゐると、時間はまるでケムリのやうに眼の前でゆらめきながら消えて行くので、さっぱり見当がつかない。ここは、本堂からその横に鍵なりへのびた庫裏からも、一段さがつた窪地になつてゐるし、南側の生け垣の向ふは崖になつて下の

通りまで降りてゐるから、どこからも見透される心配はないのだ。いや、もはや僕にとつて和尚さんは何でもない。かうやつてゐるところを見つけられたからといつて、別段ちつとも怖ろしがることはない。むしろ僕にとつて気懸りなのは、かうした静けさ——誰からも見られてゐないといふことなのだ。

いつまでも、かうやつてゐられたらな、僕は立ち木や植込みの茂みに囲まれた空を見上げ、カラカラに乾いたシーツの上に両腕をのぼしながら言つてみる。しかし、じつのところ、それは僕が怖れてゐることでもある。この温められた空気は、綿の間にしみこんでふとんをふくらませ、雑草の管の中にある青臭い汁気をたぎらせるのと同じ作用を、僕の体の内部にもおよぼしてゐることだらう。知らぬ間に自分が何か変つた姿になりつつある、これは實際へんな氣持だ。耳タブの上にとまつてゐた蠅が頬の横へ移動しはじめた。蠅の足には吸盤のやうなものでもついてゐるのだらうか、うごいて行つたあとに粘り氣のある痛痒さがのこる。僕は死んだふりをして眼をつむつたまま、黒い毛に包まれた脚が用心ぶかく頬の上を這つてゐるさまを想像する。蠅としては、地面に落ちた桃や熟れた西瓜とくらべて歩き心地はどうだらう。僕は小鼻のわきから上唇へかけて、密生したうぶ毛がだんだん黒く色づいてきてゐることを憶ひ浮べた。すると突然そこから先を考へるのがイヤになり、僕は蠅をはらひのけた。

なぜだらう、僕には自分のやつたことがわからない。僕は反射的に寢がへりをうち、横眼でそ

つとあたりをうかがふ。眼球のはしに窪地の斜面の一個所がうつり、僕はふたたびドキリとする。踏みくづされたのか、ひとりでに崩れ落ちたのか、雑草におほはれた地面が、そこだけ赤いハラワタのやうな土の断面をさらしてゐる。土の中にもぐりこんでゐた草の茎は白くツヤツヤ光つてをり、さきは細いヒゲのやうな根つこになつて、せいっぱい泥を抱へこんでゐる。……暗い重苦しいものに胸を抑へつけられて、心臓が不意に動悸を打ちはじめ。まるで頭のうへでイナビカリでもしたときのやうに、僕は眼をかたくつむり、齒をくひしばる。と、どうしたことか暗い眼蓋のなかに白い女の子の脚や股倉が浮び上り、それが見るみる強く、灼きつくやうにハッキリと迫つてきて、僕はその中にすつぱり包まれてしまふ。そして胸の動悸もまた心配や怖ろしさのためではなく、好奇心のよろこびに高鳴りはじめるのだ。

あのとき女の子は、「こはい」と言つた。股をひろげて小便をするやうな恰好で地べたにしやがみこんだままでだ。僕は、そんな彼女を息をつめながら下から熱心に覗きこんでゐた。……「こはいよう」と、女の子はほとんど泣き出しさうな声でさげんだ。何が怖いもんか、僕はその泣き声に一瞬ひるみかけながら、さう思つた。手ににぎつた鉄道草の茎が汗をかいてしをれかかつてゐる。青白いその茎は女の子の内腿と同じくらゐに柔らかく、さつきまでは冷いしめり気をおびてツヤツヤ光つてゐたのだ。女の子の顔は真赤になつた。僕は胸の中が熱くなる。……だいちやうぶだよ心配しなくても、だいちやうぶだったら。僕はせいっぱい愛想のいい微笑をとと

のへながら、女の子の方へにじりよる。

「こはいよう」

女の子はまたさげんだ。黒い瞳の中にこれまでにない恐怖の影が反映した。僕はイラ立たしい気持ちで振りかへつた。すると、女の子の弟をのせた乳母車がゆつくり、まるで夢でもみてゐるやうにノロノロと背後の斜面を、いまにも転げ落ちさうになつてゐるのだ。

そのときの緊張、その恐怖、そのオカシサが何であつたのか僕にはわからない。わかつてゐるのは僕が一瞬のところで崖下に転落しさうになつてゐる乳母車をつかまへたことと、次に女の子の脅えた顔色をもう一度ながめなほしてみたい気持ちになつたことだ。あのとき、たしかに僕はこれまでになく快いもの、愉しいものを感じた。しかし、それを憶ひ出さうとおもつても、いまはそれができない。

はじめて僕がこの寺へつれてこられたのは二年ばかり前の、冬の寒いころだ。傾斜の急な暗い石段を上つてくる間ちゆう、母は肥つた体に息をはずませながら、文句のいひどほしだつた。

「お前がわたしに心配をかけるたびに、わたしの体はそれだけ肥る」

これは彼女の口癖なのだ。母はすくなくとも親戚中では一番気楽なくらしをしてゐることにな

つてゐる。口やかましくない父と一人つ子の僕、家族はたつたそれだけだから、家にゐて面倒なことは一つもない。父が連隊からもらってくる月給は多すぎも少すぎもしないし、それで毎月のくらしを立てて行くことは子供にだつて出来るだらう。母は月給日の前ごろにお金がなくなるのと、ロバがひいてくる「玄米パン」の馬車を呼びとめてアンパンを買ひ、それを御飯の代りにした。母にわたされた五錢玉をにぎりしめて、僕はどんなに張り切つて馬車に駆けつけたことだらう。母と二人で畳の上に寝そべつたまま、紙袋の中で湯氣を立ててゐるパンを手づかみにして食べるのは、どんな御馳走よりもたのしかつた。他の家では食事だのオヤツだの時間をきめて子供にあたへるところもあるらしい。そんな規律正しきは無意味なことだと母は僕に教へたし、僕もそれに賛成だつた。たしかに家の中でわざわざ規則をつくつて自分からそれに縛られるのは馬鹿なことだ。ただ、いまになつて考へると、かうした気ままな母のやり口から一つだけ悪い酬いがきた。僕がナマケモノになつたことだ。そして、それが母にとつて唯一の心配事なのだ。学校からハトロン紙の封筒に入つた呼び出し状がくると、そのたびに母は怒りと心配で青くなりながら、分厚い胸に手をやつて、苦しげに吐き出す息といつしよに「また、こんなに肥つて——」と言ふ。おかげで僕は、いまでは母の白い皮下脂肪に圧迫された心臓が、鶏よりも、鳩よりも、雀よりも、小さく縮まつて行くさまを、まるで自分自身の心臓のやうに感じる事ができる。……しかし、ものごとろつてから僕の眼にうつる母の体軀は、いつもきはめて巨大なものに見えた

から、僕が心配をかける回数と母親の体積との間に、一体どのやうな関係があるのか判断しにくいところがある。

「ああ、くるしい……。ああ、たままない……。あーあ、ほんとに耐らない。これもみんな、おまへのおかげだ」

母は石段を一段あがるたびに仰向いて言つた。あたりは真暗で、この石段はどこまで行つたら終りになるのかわからない。おまけに、ところどころ石が欠け落ちてをり、そのたびに膨らんだゴム毬のやうな母の体は僕の肩や背中によろけかかつて、白粉のにほひと、防虫剤のしみこんだ毛織物のにほひとが、暗闇の空気を掻きまはすやうに拡がつた。——「このにほひとも今夜で当分、お別れだ」と僕は心ひそかにツブやいた。僕はけふ、これから、このお寺、永正寺でくらすことになる。東京で一流とまでは行かなくとも、二流の中には充分かぞへられるD中学の入学試験に合格したのは、僕としては大手柄だつたし、母の体もいくらかは痩せられたはずだが、その状態はせいぜい半歳ぐらゐしかもたなかつた。ブルドッグといふ仇名の担任の教師と、頭は禿げてゐるのに顔は美少年そのままの教頭から、たびたび家庭のシツケと学業に関する注意が発せられ、三学期に入ると間もなく、「このままでは原級もしくは転校の処置をとらなければならなくなるから」といふので、国漢の保成倫堂先生の家へ、入院、させられることになつたからだ——。僕にとつて、この処置は二重の意味でありがたかつた。一つは、入院、することは学校の

中で、ただの劣等生とはちがつた箔をつけられることになるからだ。頬のこけた赤ら顔のZ、もみあげを長く耳の下までのぼしてゐるK、平らなトリトメのない面だちなのに眼つきだけが鋭いI、彼等はみんな上級生だが、それぞれ札つきの入院患者として、われわれから怖れられてゐる。彼等の顔には、例へば鉄格子の影がさしたやうな陰鬱な精悍さと近寄り難さとがあり、僕は自分もまたそのやうな顔つきになるのかと思ふと、言ひやうのないよろこびと緊張とを感じたのだ。それにあづけられる先の保成倫堂先生の家が曹洞宗の寺で先生はその住職だといふことも、何か一風変つた期待をいだかせる。……しかし、何よりありがたかつたのは、同じ個所を練習してゐるヴァイオリンの執拗さでまづりついてくる母の嘆声から逃げ出せることだつた。

「ああ、またこんなに肥つて」お母さんは、それをどこまで本気で言つてゐるのか？ 僕はときどき母が「姉さん」ぶつてゐるやうに感じる。僕だつて知らずしらずそれに調子を合せてゐやしないか？ さう思ふと僕は後足で得体のしれないものをグニャリと踏みつけたやうな氣持になり、わけのわからぬ狼狽とイラ立ちしさをおぼえてつぶやく。「お母さんなら、もつとお母さんらしくしてゐるがいいや」

僕の想像したお寺といふのは、頭を剃り上げた何人もの小坊主が、朝の暗いうちからお経を説

んだり、庭の落葉を掃いたり、隊伍を組んでひろい廊下や縁側を拭いたり、といったわれわれの日常とはちがつた集團生活の行はれてゐるところだ。それは厳しいかはり、お母さんの調子はづれのヴァイオリンみたいに気まぐれな小言をしつつこく聞かされることもないだらう……。しかし、ここには寝とまりしてゐる僕と同じ年頃の小坊主はゐなかつた。ひろい縁側も廊下もなかつた。お寺といへばすぐ頭に浮ぶ鐘突き堂もなかつた。鐘は本堂のすみに火の見ヤグラの半鐘ほどのが吊るしてあり、その横の骨壺をあづかる部屋に黒い立型のピアノがあつた。日曜日になると、この半鐘のやうな鐘が鳴らされ、集つた近所の子供たちが倫堂先生のピアノを伴奏に、

天にはひかり地には花

たつた一人の王子さま

といふ歌を合唱する。それはキリスト教の讃美歌に似てゐるが、おシヤカ様の誕生を祝ふ歌なのだ。このお寺はキリスト教の日曜学校をマネしてゐるにちがひなかつた。どうしてそんなことをするのか、僕にはその理由はわからない。しかし古びた本堂からお経の代りに讃美歌めいた唱歌が聞えてくるのは、このお寺の性格をあらはしてゐると言つてもよかつた。先生の奥さんは鼻の長い、背のすらつとした人で、女子大出身ださうだが、この人がやはりお寺さんの出だとは思議な気がする。余計なことだが、僕はお坊さんの結婚式とはどんなものか、考へると何だか奇妙になるのだ。先生と奥さんの間に、四つになる女の子と、赤ん坊の男がある。それにいやに顔

の幅のひろい猫背の女中、これが家族の全員だ。

要するに、お寺には僕の好奇心を満足させるやうなものは何もなかった。ただ普通の家にくらべて建物がずっと大きく、古めかしく、暗くて、陰気だといふだけのことだ。最初の夜、つきそった母がかへつたあと、先生は納戸の奥のかがへられないほど薄暗い部屋に僕を案内した。なかへ入ると畳がふはりと、まるで古いふとんを踏みつけたやうに凹み、びつくりして思はず次の足をシッカリ踏み出すと、ぼこつと鈍い音がして畳のつなぎ目が一寸ほど落ちた。床のどこかが腐つて折れたにちがひなかった。反射的に僕は先生の顔を見上げた。そのときの和尚さんの顔をなぜか僕は忘れることができない。先生は何も言はず、口の中で小さく舌をうごかすと、瘦せた頬に微笑のやうなものをうかべた。すると僕は、この人は黄疸をわづらつたのだといふことを憶ひ出した。一学期の中頃からしばらく、国語と漢文の授業が休みになつて、われわれは先生の病気に感謝した。そのとき聞いた病名を、いま僕はこの古い部屋で突然想ひうかべたのだ。シジミ、泥のなかで住んでゐる貝が黄色い汗を止めてくれる病氣、それを僕らは他人の無関心さで噂し合つた。しかしいま同じ無関心さが僕を檻のやうに閉ぢこめてしまつた。

「ぢや、今夜はゆつくりおやすみ」

「おやすみなさい」

和尚さんが部屋を出て行くときの言葉を芝居じみてゐると思ひながら、僕は追ひつめられた動